

ナイトのリスク・不確実性およびインフォデミックな不確実性 ——「第三の不確実性」抽出試論——

黒 木 亮

目次

- I. はじめに：「ナイトの不確実性」の今日性と問題点
- II. 既知のリスク・未知の不確実性および半端な不確実性：それらの重複性と派生性
 - (1) ナイトの「不確実性」と「リスク」および「利潤」：ナイトの基本的見地
 - (2) 「幻の金魚」の類推：リスク、アンサー・ウンティおよびアール・アンド・ユー
 - (3) 虚と実から生まれる不穏性：「第三の不確実性」の幻惑性と破壊性
- III. おわりに：『リスク・不確実性および利潤』の普遍性

I. はじめに：「ナイトの不確実性」の今日性と問題点

昨今のように世界各地で政変や天変地異が生じたり、各種の市況やその周辺環境が急変し、世界規模の経済危機が生じかねない不穏な空気が流れると、しばしばどこからともなくフランク・ナイト (Frank Knight: 1885-1972) の名前が浮上してくる印象がある。まさに今からちょうど100年前——学史的には今日のようなパンデミック (世界的大流行) を引き起こした「スペイン風邪」による肺炎でマックス・ウェーバーが命を落とした翌年——の1921年に、ナイトが発表した出世作、『リスク・不確実性および利潤 *Risk, Uncertainty and Profit*』 (Knight [1921] 2006) に並ぶキーワードが、引き合いに出される傾向が強くなるように感じられるのだ (なお以下でこのナイトの名著に触れる際には、『利潤』

ないしはRUPといった略記を用い、参照ページには原典の該当頁のみを併記することにする¹⁾。どうやら危機の背景や原因の一部には「ナイトの不確実性」があるらしい、ということのようなのである。

実際、そうした危機に直面した各国の要人、とりわけ中央銀行の総裁やその経験者など、金融政策の権威や当局者が残した回想録や著作、コメントなどを眺めれば、ナイトの名前や「ナイトの不確実性」といった発言を少なからず目にするのできるだろう²⁾。それどころか、いわゆる市場関係者や金融アナリスト、エコノミストと呼ばれる現役のコメンテーターや優れた経済キャスター等々が、特に何の断りもなく「不確実性」という言葉を敢えて用いている時また、「ナイトの不確実性」を念頭に置いて話をしているはずなのである³⁾。

そして確かに、今日われわれが経済危機などに際して直面する不確実性の多くは、ナイトが『利潤』

- 1 訳書としては、奥隅栄喜訳『危険・不確実性および利潤』(文雅堂銀行研究社, 1959年)と桂木隆夫・佐藤方宣・太子堂正称訳『リスク、不確実性、利潤』(筑摩書房, 2021年)が既に存在しているが、それらの訳文には従っていないため (また拙訳『リスク・不確実性および利潤』がミネルヴァ書房から刊行予定であり、その修正作業の再遅延——二度目の訳し直し——を避けるべく新訳の参照は控えているといった事情もあって)、それらの該当ページ数の併記は省略させていただくことにした。なおナイトの他の著作や彼の経歴などについては、Emmet (2009; 2013) や Cowan (2016)、あるいはナイト (2009) に収録されている拙稿「解説 フランク・ナイトの複眼」や酒井 (2015) などを参照されたい。
- 2 一例を挙げれば、マーヴィン・キング元イングランド銀行総裁の『錬金術の終わり』(キング 2017) がある。
- 3 そうした事態についての一般向けの解説書としては、「世界を変えた金融危機」を論じた竹森 (2007) が参考になるだろう。より専門的ないし学術的な「ナイト的不確実性 Knightian Uncertainty」や、その下での意思決定などについては、それらの整理や公理化、現実的含意の抽出を現代理論的な見地から行った Nishimura and Ozaki (2017) がある。さらに、よりナイト (とケインズ) に即した見地からの思想史的整理や今日の評価を行った研究書としては、Greer (2000) や Sakai (2019) がある。

で定義したような不確実性だと言ってよい。次節「既知のリスク・未知の不確実性および半端な不確実性」で確認していくように、彼自身が『利潤』のなかで、計算や対処が可能な既知の不確実性を「リスク」として分類したうえで、計算不能で対処が難しい未知の不確実性を「真の不確実性」として峻別していたからである。したがってこの真の不確実性は、例の「黒い白鳥」——すなわち極めて稀な現象か想定外の事態ゆえ、その出現や発生によって世が騒然となる金融危機のような事象——にも当てはまりうる、優れて普遍的な概念であると言ってよい。そればかりか、いわゆる「灰色のサイ」——普段はおとなしいが暴れ出すと手が付けられない白サイやもともと獷猛とされる黒サイのように、危険な大問題に転じる可能性については広く認知されながらも軽視されがちな、バブルの崩壊のような事態——はもちろん、「黒い象」——その巨体や破壊力は周知であるにもかかわらず、あるいはその自明さや甚大さゆえに、日々の話題や視界の外に置かれてしまいがちな環境破壊のような大問題——にも、さらには次節の第二項『『幻の金魚』の類推』^{アナロジー}で「赤黒い金魚」として分離・抽出する「第三の不確実性」にまでも該当しうる、極めて一般的な概念であると言っても過言ではないのである。

だが、そのためにかえって、いわゆる「ナイトの不確実性」は、今日われわれが直面している不確実性を細かく分析したり、的確に把握するための概念装置としては、やや大振りにすぎるといった弱点も抱えている。突き詰めて考えてみても、逆に大雑把に言っても、日常語の不確実性と結局のところほとんど大差がなくなってしまうのである。

本稿において、ナイトが『利潤』で特定した不確実性の意味内容を再確認し、今日われわれが直面している不確実性と特に共振・共鳴し合う部分を抽出したうえで、その派生部分を「第三の不確実性」として分離しようと試みる理由はここにある。先述した「リスク」と「不確実性」を改めて「第一の不確実性」と「第二の不確実性」として振り分けたいうえで、それらの混同や混在によって派生し、増幅する「半端な不確実性」を、「第三の不確実性」とし

て選り分けてみようというわけである。

実際、現在の経済不安も、13年前に起こったリーマン危機も、通底するのはこの「第三の不確実性」だと言ってよい。たとえばリーマン危機は、そもそもはアメリカで生まれた信用度の低い借り手への新車の住宅ローンの債務不履行——いわゆる「サブプライムローン問題」⁴——という未知の「不確実性」を、ほんの一部（数%）が焦げ付くにすぎない既知の「リスク」と同等（ないしは同質）と見誤ったことが、事の発端（2006年末頃）であった。燻り続けたその火種が約半年を過ぎた頃、関連金融商品の価値の急落などによるフランス発のパリバ・ショック（2007年8月9日）を引き起こし、さらにその約半年後、関連商品に傾倒していたアメリカの証券会社の危機——ベアスターンズ・ショック（2008年3月）——とその救済・收拾を経て、再び（ないし三度）^{みたび}半年を経た頃に、一部の市場関係者の予想に反して救済されなかったアメリカのリーマン・ブラザーズが経営破綻したことを引き金に、世界規模の金融市場の混乱と産業活動の収縮へ——すなわちリーマン・ショック（2008年9月15日以降）へ——と突入していったのであった。

同様に、中国湖北省の武漢市から2019年の末以降、世界中へと伝播したとされる新たな感染症に端を発する今回の一連の——現在進行中の——危機も、発端は新型のコロナ・ウィルスに絡む未知の「不確実性」を、インフルエンザ等に類する既知の「リスク」と同程度か、少しそれを上回るくらいの「中途半端な不気味さ」程度に見誤った一部の人の言動と無関係ではなかったといっても、決して間違いとは言いきれまい。リスクを不確実性と勘違いしたり、不確実性をリスクとして軽視したり、両者を混同して訳が分からなくなった結果、混迷の度をさらに深めるといったことも含む「中途半端な不穏さ」こそ、「第三の不確実性」の核心なのだと言い換えてもよいだろう。

何より象徴的なのは、今般のコロナ禍の渦中ではマスメディアだけでなく、「SNSなどを通じ、正しい情報と不確かな情報が混じり合って拡散し混乱が増幅する『インフォデミック』という事態」⁵が、

4 この問題に関しては、まさに『サブプライム問題の正しい考え方』について論じた、倉橋・小林（2008）がある。

5 「インフォデミック」については、本文で引用した『日本経済新聞』（2020年3月31日付夕刊14面）の記事の語句説明の部分をはじめ、WHOのホームページなどを参照した。また新型コロナ全般に関しては『新型コロナの科学』（黒木 2020）などを参照のこと。

より顕著になってきたという現実である。そもそもこの言葉自体、今回の危機に直面したWHO（世界保健機関）が、information（情報）と pandemic（世界的な伝染病の蔓延）を合成して生み出した造語であり、各種の疑惑や真偽の不確かな情報が新型コロナ・ウィルスと同様か、それ以上のスピードで伝播していく事態に危機感を抱いて自らかたり始めた新語であった。いわばこのキーワードそのものもまた、今回の混乱の最中に生まれてきた一種の“キメラ”に近いとも言えるのである。

本稿では、こうしたキメラ的な概念としての「仮想的な不確実性」についても、ナイトによる「リスク」と「不確実性」の概念整理に依拠して考察し、その一種の“発生源”ないし派生過程についての探索を試みる。そうした探究を通じ、「真偽の不確かな情報」による「半端な不確実性」を「第三の不確実性」として浮き彫りにし、その“化身”としての「赤黒い金魚」の“実像”ないしは「虚像」まで、仮想の思考実験によって明瞭に浮かび上げてみたい。

II. 既知のリスク・未知の不確実性および半端な不確実性：それらの重複性と派生性

結論からいえば、昨今の「半端な不確実性」の一応の“正体”は、「リスクとして過小評価されている不確実性」と「不確実性として過大評価されているリスク」、そして「このいずれでもありうる半端な不確実性」だと言ってよいだろう。本節では、これら三重の意味を同時に帯びうる「第三の不確実性」を、ナイトの「リスク」と「不確実性」の峻別作業にならって派生させ、この二者からの分離・抽出を試みる。したがって、以下ではまず何より、ナイトの「リスク」と「不確実性」の概念の定義を（再）確認し、それらの正確な理解に努めることから始めなければならない。

(1) ナイトの「不確実性」と「リスク」および「利潤」：ナイトの基本的見地

そもそもナイト自身は、たとえば「企業と利潤」という章題をもつ『利潤』の第9章において、「われわれは、人々が個人として全知で不死身であるとか、完全に合理的で、予測のできない急変からも免れているなどと想定するつもりはない」と明言したうえで、「われわれは、大規模な自然災害や伝染病、戦争等々は考慮しないつもりであるが、死を免れない人生の『自然な』盛衰と共に、天候やそれに似た類のものをもつ『通常の』不確実性や、人間の選択に関わる不確実性を、当然のものと思ふ」と述べている（RUP, 266）。

そしてさらに見逃せないのが、その文章の「脚注」で追記されていたナイトの私見である。なぜならそこでは、後にケインズが『貨幣改革論』（1923年）で「貨幣数量説」について触れながら語った有名な文句である「長期的には、われわれはみな死んでいる」（ケインズ 2014, 83：傍点——原文ではイタリック——による強調はケインズ）と同様の趣旨の見解が述べられているからである⁶。そればかりか、より長いタイムスパンを想像させるニーチェの（永劫回帰）思想に触れた件もそこには挿入されており、そのようにしてナイト自身の人生観や宗教哲学的知見、自然観や科学的見地の一端も吐露されている。さらには、ナイトの注目する「不確実性」が、本節の主題として次項で抽出を試みる「第三の不確実性」や今日の「半端な不確実性」に絡む重要な論点——いわばわれわれの「信じ込み易さや騙され易さ」などに関わる問題——からは明確に区別されていたということまで、その脚注では確認することができるのである。それゆえ少し遠回りにはなるが、できるかぎり長く引いてみよう。

物理的特性においてであれ、人間本性においてであれ、真の不確実性や予測のできない急変 [caprice] が果たして存在するのかわかるとは、われわれには分からない。あらゆる変化がいつでも自己補正的なものになっていく可能性はあ

6 引用文に併記した参照ページは、現在最も入手しやすい新訳版『お金の改革論』（山形浩生訳、講談社学術文庫）のものであるが、そこでの訳文は「長期的には、われわれみんな死んでいる」となっている。そのため従来の定訳に従った本文はやや不正確な引用になってしまっていることを、ここでお断りしておかなければならない。

るし、もし進歩が無くなったなら、われわれは、たとえ個別の事象においては無理だとしても、総体的には（整理統合の原理の適用を通じ）、現象に関する予言能力を最終的に手に入れる可能性もあるだろう。だが、たとえば天気予報における悲しいくらいに限られた科学の成功を考え合わせるなら、大量の真の不確実性を想定するからといって、そこに「われわれの」信じ込み易さや騙され易さ [credulity] に付け込んだ歪曲や曲解 [strain] があるわけではないということは明らかである。われわれは、変化の周期性、もしくは、波のような複数の変動を相殺させるのに必要とされる期間が、実際には、人生の長さに関わる相対的なものだとすることを忘れてはならない。もしそのような相殺が（一部の著述家——特筆すべきはニーチェ——が想定しようと挑んできたように）最終的には起こるとしても、その期間は、人生との関わりにおいてはあまりにも長いため、それによる利益は得られないのである。（RUP, 266: 文中の丸括弧による補足や傍点——原文ではイタリック——による強調はナイト、角括弧による補足は引用者）

今日の功利主義的な合理的意思決定論ではしばしば議論の最初の段階で「既知で安定的である」と前提されてしまう選択肢——ないしは「状態空間」——そのものの不確実性や、「不確実性」概念そのものの曖昧さ、さらには、想定する時間軸によっても変化しうるそれらへのナイト自身の迷いのようなものまでが率直に語られている興味深い告白である。と同時に、天気予報を信じるか否かといった問題と、天気予報が的中するか否かといった問題がまったく違う次元の話であるといった点も考慮に入れ、たとえば予報が外れたとしても騙されたなどとは思わないだろうといった現実まで想起すればより明らかになる通り、「大量の真の不確実性を想定するからといって、そこに「われわれの」信じ込み易さや騙され易さに付け込んだ歪曲や曲解があるわけではないことは明らか」だといった指摘もなされている。こうした主張をみれば、本項で確認する「ナイトの不確実性」が、次項以降で考慮する「われわれの軽信性 credulity」や「第三の不確実性」とは異なる

次元に位置づけられているといった点もまた、一応は確認できたといってよいだろう。

このように人間的な論点や観点を背後や根底——あるいは脚注——に潜在させた、科学的で実際的な見地こそ、ナイトの基本的な立場である。今日においても（良い意味で）常識的な見方として通用すると思われるこうした見地が、彼の議論の「大前提」だと言い換えてもよい。そうした点を踏まえたうえで、次に確認したいのは、彼が理論的なないし理念的に峻別した「不確実性」と「リスク」の概念の一応の定義である。

これについては、たとえば「不確実性に対処するための仕組みと方法」と題された『利潤』第8章の冒頭で、「測定可能な不確実性」には「リスク」という言葉を充て、「測定不可能なもの」には「不確実性」という言葉を用いると述べた後、続いて——第二段落において——それらの違いを次のように整理している。

リスクと不確実性という二つの範疇の間にある現実的な違いは、前者では複数の事例からなる一つの集合のなかでの帰結の分布が、（先験的な計算を通じてか、もしくは過去の経験に関する統計データからか、いずれかによって）分かっているのに対し、不確実性の事例ではこれが当てはまらず、その理由は概して、対処されている状況が極めて独特なものであるために、複数の事例からなる一つの集合を形成することが不可能だということにある。（RUP, 233）

ナイトはまた、この文章の直前——第一段落の最後の方——で、「『客観的』 [確率] や『主観的』 確率」といった言葉をそれぞれ先述のリスクと不確実性を指して用いることもできる」（同上）とも述べていたから、彼は統計的な推定や確率論的な計算が可能で客観性が担保できる不確実性を「リスク」に分類し、それとは異なり何らかの主観的判断がどうしても避けられない不確実性を「真の不確実性」に位置づけていると言い換えてもよいだろう。

では前者の計算可能な「リスク」について、ナイトは具体的にどのような事例を想定していたのか。彼はたとえばビジネスの現場で直面する「リスク」の一例として、「シャンパン製造ビジネス」に

伴う「ボトルの破裂」を挙げている。いわゆる「不良（品）率」や「歩留まり」に関わるこうした事例を彼以前に指摘していたドイツの経済学者マンゴルト（Han Karl Emil von Mangoldt: 1824-1868）の名と共に紹介したうえで、そうしたリスクに伴う損失の固定費への転化や消費者への転嫁などについて指摘しているのである。そればかりか、そこからさらに「保険の原理」についての解説まで一気に——段落を変えることなく——展開してもいる。そうした“息遣い”も含め、改めて彼の文章に直接触れてもらうことにしよう。彼は言う。

フォン・マンゴルトによって提示された事例において、ボトルの破裂がシャンパン製造ビジネスに不確実性ないしは不測の^{ハザード}危害をもたらすことはない。なぜなら、およそどんな生産者であれ、その事業においては事実上ほぼ一定で既知の割合のボトルが破裂するからであり、その割合が大きいのか、小さいかは特に問題ではないからである。そうした損失は、その産業では固定費となり、労働者や原材料やその他諸々への支出と同様、消費者へと転嫁されてゆく。またたとえ、単独の生産者では、問題となる偶発的^{ランダム}の出来事に関わる事例を十分大きな数だけ取り扱っておらず、（十分短い期間において）それがもたらす影響の恒常性や不変性を確保しているわけではないとしても、多数^{ラージ・ナンバー}の生産者を取り込んでゆく組織編成を通じて、同様の結果が容易に実現される可能性がある。これは、もちろん、火事による損害の可能性を例に説明されることでおなじみの、保険の原理である。ある特定の建物が焼失することになるかどうかを語ることなど誰にもできないし、また建物の所有者の（一部はそうではないとしても）大半は、そうした損失を一定のものへと転化させるほど十分な規模では操業していない。だが、よく知られているように、保険の効能は、この基礎原理を拡張して多数の人間が行う事業に適用し、偶発的な出来事を固定費へと転換することにある。（RUP, 213）

要するにナイトのいう「リスク」とは、（1）「大数の法則」を応用した計算や（2）「保険の原理」⁷を援用した費用処理が可能な“不確実性”としてまとめることができるだろう。

逆にいえば、真の「不確実性」の方は、事前に算段したり、費用として処理することが不可能な点に、その本質がある。そしてまさにそうした不確実性に起因する「不確定所得」こそ、ナイトのいう「利潤」に他ならない。いわば市場のメカニズムの外で事後的に算定するよりほかはない「残余所得」こそ、ナイトが（新古典派）^{いさか}経済学の見地から、分配問題をめぐる無用な争いや混乱を除去すべく改めて厳密に定義し直そうとした「利潤」なのである。理論的には「帰属計算の不可能性」にもつながるこの「不確実な所得」の特徴について、ナイト自身は、「雇われ経営者」という副題（と第9章と同じ章題）をもつ第10章「企業と利潤（つづき）」の終盤で次のように説明している。

産業を組織化する競争システムは、生産物の価値を、生産活動に関与した要素^{エージェンシー} [agencies] に帰属させる。この意味で純粋な利潤は、理論的には帰属不可能である。この競争過程では、いずれかの要素に関連づけられる生産物の価値は全て、そうした要素に生じるであろう。この過程の本質は、企業家や企業家予備軍たちが、将来における生産的サービスの利用をめぐって^{ビidding}競り合いをしていることにあり、報酬の相場が、現在そのサービスの価値をめぐって市場で広くなされている競争的な推定によって決められることにある。他方で、不確実であるという事実、すなわち人間の予想は全てはずれる傾向にあるという事実を考慮すると、それら[生産的サービス]の利用によって最終的に入手される^{リターン}収益は、この推定値から乖離することになるだろう。（RUP, 308-309）

いわゆる「ナイトの不確実性」が、市場の混乱期に語られがちな理由の一端を垣間見ることのできる文章である。なぜなら「人間の予想は全てはずれる傾向にある」がゆえの“市場予想”からの「乖離」、

7 「保険の原理」については、たとえば田畑・岡村（2020）を参照のこと。

すなわち市場参加者の計算違いによって生じる「差額」こそ、「ナイトの利潤」に他ならないからであり、プラスとマイナスどちらにも転びうるそれが「問題」になるのは、大抵、「市場で広くなされている競争的な推定」がマイナス方向に大きく外れ、莫大な「損失」などが顕著になった時だからである⁸。

さらに問題をややこしくする点もある。それは「最も優れた人々でも、ある一定の割合で失敗するだろうし、最悪の人間でも、恐らくある一定の割合で成功をおさめるだろう」という現実である（RUP, 281）。そもそも「最善の判断や最高の能力の行使にも、避けられない誤差が存在する」といった面もある（同上）。

いずれにせよ重要なポイントは、ナイトのいう「利潤」が（特にプラスの場合には）、時勢の追い風や時宜の良さ等々といった諸々の幸運や好運、偶然やまぐれと不即不離の関係にあって、そうした計算のできない「不確実性」に結果的にしか帰着させることのできない残余所得だという点である。それは何より「人間の予想は全てはずれる傾向にある」という現実に起因する「不確定所得」なのである（ごく一握りの“成功者”が、他との能力の違いや努力の差、一般的な価値観や道徳観では正当化できないほど莫大な—恐らくは当人にとっても望外な—報酬を、現行の法制度や契約条件といったルールの範囲内で手にしうる理由の一つは、この辺りにもあると言ってよいだろう⁹）。

ナイトの「利潤」と「不確実性」および「リスク」との関係の有無は大よそこのように整理できるが、以上の概説を踏まえたうえで次に浮き彫りにしたいのは、推定値からの乖離や計算間違いとは次元の異なる「第三の不確実性」の“存在”であり、それが生じる背景である。いわばわれわれの「信じ込み易さ」や「騙され易さ」、「歪曲」や「曲解」をも視野に入れた「真偽の不確かな情報」による「半端な不確実性」への接近を試みるわけであるが、そうした過程に避けがたく存在する“藪蛇”にも似た“存在”を「赤黒い金魚」として明示するため、次項ではまず、判断に迷う一つの場面を想像してもら

うことから始めなければならない。

(2) 「幻の金魚」の類推：リスク、アンサー トウンティおよびリアル・アンド・ユー

たとえば水族館の一角や、現代美術の展示施設のなかに、何らかの経緯で迷い込んでしまった場面を想像していただきたい。そこにはわれわれの背丈を超えるほどの大きなタイヤか、円い薄型TVのような、巨大な凸レンズにも似た水槽が二種類、互い違いに並置されている。それらは大人がすれ違える程度のスペースを挟んで—半分ほどずらして—配置されており、それらの間を縫ってわれわれが眺める複数の水槽のうち、一方は黒みがかかったアクリルガラスで囲まれ、そのなかではリスクという大小さまざまの—大きいものは30センチを超える—赤い金魚が無数に泳いでいる。そして、もう一方の赤みがかかった水槽では、アンサータウンティという同じく大小さまざまの黒い金魚が無数に泳いでいるとしよう。

この場合、見る位置や角度によっては、遠くに薄ぼんやり見える金魚が果たしてリスクなのか、アンサータウンティなのか、どうにも判別がつかないといった場面に出くわす可能性は決してゼロではないだろう。またそれらを判別しようなどとそもそも思っていない時に、黒い水槽（ないしは赤い水槽）の側から移動しないまま判断を下すよう促された場合や、判別しようとする意思はあるものの気になる金魚や水槽の前からまだ移動したくはないと思っているタイミングで判断を催促されたような時にも、きっと判断を迷うに違いない。そしてそうした場面では、恐らく、問題の金魚がリスク（あるいはアンサータウンティ）に見えてしまう瞬間もあれば、「よく分からない」と判断を留保せざるをえない時もあるだろうし、「どっちだって同じでいいじゃないか」との心の声が思わず口から漏れ出そうになる瞬間もあるのではなからうか。

また後日、別の機会に、リスクの水槽の側から撮った写真に映り込んでいるアンサータウンティが、あたかもリスクであるかのように第三者によ

8 このように最終的には「損益計算」に帰着しうるともいえるナイトの「不確実性」や「リスク」に、「管理会計」の見地から接近しようと試みた研究として、西村（2021）がある。

9 あるいは、報酬として受け取った数百億円相当の自社株を、市場で早々に売り抜ける“判断の良さ”といった—経営手腕や創業者利益などはまた別の—要素も、ここに付け加えるべきかもしれない。

て意図的に、時に善意からプレゼンテーションされている場面に出くわしてしまうこともあるかもしれない。またそうした写真や投稿を見た人々が、勝手に——悪意やフェイクの介在がなくとも——リスクとアンサートウンティを取り違え、不確かな言動を積み重ねていく場面に遭遇する可能性も、決して考えられないわけではないだろう¹⁰。自身を含む関係者全員が、多種多様な「真正銘」の「不確実性」と文字通りの「リスク」に同時に襲われている現実のなかでは尚更である。

要するに、判断を下す人間の立ち位置や見る角度、光の当たり具合や時間軸、見識や想像力の違い等々から、リスクかアンサートウンティか判別がつかなくなってしまった結果として派生してくるような不確実性も、現実には生じかねないということであり、それを「第三の不確実性」として分離・抽出することも一応は可能だ、ということである。

実際、以上の構図から時間と奥行——あるいは文脈——を捨象した抽象化を行うべく、ある一つの視点から二つの水槽を写し取り、二次元平面に投影してみたとしてしよう。そのうえで、例のヴェン図のような縁取りによる簡略化を試みてほしい。すなわち、リスクという名の無数の赤い点を囲む、黒い紗のかかった円（R）と、アンサートウンティという名の無数の黒い点を囲む、赤い紗のかかった円（U）が、一部重複する形で並置された平面図の形にまで単純化してみるのである。そのように整理した眺めには、現実には存在していなかった（本来は真っ赤なはずの）黒いリスクや（実は真っ黒なはずの）赤いアンサートウンティばかりか、（Riskであると共

にUncertaintyでもある）アール・アンド・ユーという新種のキメラの“存在”まで浮上してきかねないことが、きっと確認できるに違いない。

言い換えれば、これらの「赤黒い金魚」——すなわち「リスクとして過小評価されている不確実性」と「不確実性として過大評価されているリスク」、そして「このいずれでもありうる半端な不確実性」——は、それらを見極めるための判断材料となる情報が少ないか、立脚している地平の次元が低いために生じる「代物」にすぎない。いわばそれは、正確な判別が事実上不可能な事態やデータに直面したわれわれが、それらの識別や判定、意見の確定を迫られて見間違いや見当違いをしている時のみ、解釈や決断を行おうと試みている当人の頭のなかやその「根拠」とされる写像のなかにだけ“存在”する——まさに「幻の金魚」——にすぎないのである。と同時に、そうした写像上の金魚と瓜二つの赤黒い金魚もまた、実際には無数に存在するだろうし、そのようにしてそれらは先の写像の真実性を物理的に裏付ける心の拠り所にもなるだろう¹¹。

さらに難しいのは、それらの真偽——あるいはリスクと不確実性——が、それぞれの立場や見地によっても変わりうるということである。このことは、例えば新型コロナ・ウィルスへの感染という危険性が、持病を抱えた方や自覚症状のない疾病予備軍の可能性が高い一定年齢層以上の方々にとっては、死に直結しかねない厳然たる「不確実性」として感じられる一方、諸々の自覚症状が少ない一定年齢層以下の人々にとっては、以前から存在するコロナ・ウィルスによる風邪に近い確率論的な「リス

10 なお本稿では、基本的に「悪意のないケース」（のみ）を想定している。とはいえ、以下の議論を経て導かれる結論やその含意が、意図的な歪曲や曲解への誘導を目的とした“切り取り”をはじめとする大小さまざまな“陰謀”や、詐欺のような“騙り”ないしは“騙し”が潜んでいる場合はもちろん、そうした企みとは対極の善意や正義感が顕かなケースにも同様か、それ以上に当てはまりうるということは、改めて指摘するまでもないだろう（あるいは、それらの重なり合いによって生じる悲劇やその背後に潜む機序や機微などについては、各種の「古典」の方がきっと参考になるに違いない）。

11 近年注目を集めるマルクス・ガブリエルの「新実存主義」の見地にならば、この「第三の不確実性」は、「世界」や「心」といった概念に近いが、それらよりも低い次元で並行的に捉えることができる概念だと言えるかもしれない。なぜなら彼の唱える「新実存主義とは、『心』という、突き詰めてみれば乱雑そのものというしかない包括的用語に対応する、一個の現象や実在などありはしないという見解であり、「ふつう『心』という看板でひとくくりされている現象は、明らかに物理的なものも現実には存在しないものも幅広く含む、ひとつのスペクトル上に位置づけられると考えるのだ」と述べているからであり、「いずれの現象も、純粋に物理的な世界や動物界のほかのメンバーから、人間が自分を区別しようとする試みに由来していることにある」と主張しているからである（ガブリエル 2020, 16）。

また同様の類推は、いわゆる会社——すなわち従業員や顧客、取引先や株主といったあらゆるステークホルダーと共に、それらとはやや異なる次元に“存在”する法人——にも、同様に当てはまるように思われる。言い換えれば、「会社は誰の“モノ”か」といった問いの立て方自体に根本的な問題があると言わざるをえない理由も、この辺りにあるように思われるのである。

ク」程度にしか感じられない可能性が高いという現実——いわば同一の現象をめぐる「認識の非対称性」¹²——からも伺えるだろう。

しかも、そうした認識が偽ないし勘違いである場合の言動には尾ひれがつき、次元も低くなっていくというのが相場である¹³。そのようにして折り重なっていく誤解や見当違い、それらをめぐる不確かな言動や疑心暗鬼までもが、新たな不確定性や不穏さの種として増殖しかねないのである（ついでに付け加えるなら、安全と安心などをめぐる意識の問題や過去についての認識に関わる議論がなかなか噛み合わず、立場や学派を越えた対話が建設的なものになりにくい背景も、ある程度は以上の例え話で説明ができるのではないかと思われる）。

（3）虚と実から生まれる不穏性：「第三の不確定性」の幻惑性と破壊性

以上の類推はあくまでも仮想の話であって、実体験に基づく話でもなければ、二色の金魚が入った複数の水槽を実際に設置して検証したわけでもない。そのため反証の余地は、多分に残っているだろう。これはあくまでも、何らかのフィルターや時空の隔たりを挟み、次元をたった一つ落としただけで生じる「幻の金魚」の例えを用いて、「リスクとして過小評価されている不確定性」と「不確定性として過大評価されているリスク」、そして「このいずれでもありうる半端な不確定性」という「^{さんじゅう}三重の不確定性」を想起させるための架空の^{シミュレーション}模擬実験にすぎない。いわばそれは、われわれの認識のなかに“存在”するそれらの「幻想性」を浮かび上がらせると同時に、まさにその“虚像”が——画面上を無限に循環する「階段」や「滝」を描いたエッシャーの「だまし絵」や、ロバート・キャパの「崩れ落ちる兵士」¹⁴

の写真のように——ある角度からみえる“風景”の一部を見事に写し取った「画像」や「名画」として歴史的な遺物にもなりうる、という現実の一面を浮き彫りにするための、一種の「^{フィクション}虚構」にすぎなかったのである。

とはいえ、「第三の不確定性」の重層性や錯綜性、問題の所在やその^{ややくさ}しさは、既に十分伝わったのではなからうか。重要なポイントは、この「第三の不確定性」が、実際の金魚やウィルスのように^{フィジカル}物理的には存在していない幻影か、それらに絡んで派生した写像を伴う中途半端な不確定性であるという点にあり、したがってそこには、事後的にも解きほぐせないかもしれない誤解と、真実の背景や^{ぜんじやう}前景ないしは影が、同時に——^え画や^え画角の内側と外側に二重の意味で——^{うつつ}出され、反映ないし投影されているという点である。そしてこのように、陰影や光彩、虚像や実像が錯綜しているがゆえに、かえって、偶然の重なり合いや組み合わせ（の悪さ）次第で無限に増殖したり、時空を超えて瞬時に拡散し、際限なく伝播しようという側面すら抱えていると言ってよい。

しかもそれは、確たる証拠にみえる側面と未知の側面が混在する半端な不確定性であるがゆえに、一層膨らむ猜疑心や恐怖心——あるいは「情報の非対称性」や「逆選択」ないし「逆淘汰」——によって「悪貨が良貨を駆逐する」かのように勝手に自己増殖をはじめ、まるで悪夢が正夢にでもなるかのようになり「自己実現的予言」にも似た形で事態の悪化を招くという悪循環まで招来しかねない。当初は数パーセント程度といった推定値によって想定されていた被害予想とは比べ物にならないほどの悪影響が世界中に伝播し、数千兆円規模の市場価値や市場機能そのものまで現実に消失させるほどの（半端どころ

12 生活習慣や身体的特徴、衛生観念や医療基盤の違い、あるいは今後の先行き等々についても考慮する余地はあるにせよ、同じコロナ禍に直面した国々において、いわゆる超過死亡が2020年に関してはマイナスであったとされる日本のような——結果ないし途中経過からみればリスクや不確定性を良くも悪くも過大に恐れた可能性が高い——経済社会もあれば、新型コロナによる死者数が第二次世界大戦での戦死者数（30万人弱）を2020年末時点で上回ったとされるアメリカのような——リスクや不確定性を過小に見ていた可能性が高い——経済社会もあるといった現実もある。こうした点に着目すれば、同一の事物や事態に対する「認識の非対称性」は、国（民）レベルでも“存在”しようと言えるのかもしれない。

13 いわゆる“風評”（被害）をめぐる報道や言説は、その典型型といってよいかもしれない。なぜならこの言葉が、未知の「不確定性」として警戒されてしかるべきものや既知の「リスク」として対処されてしかるべきものにまで安易に用いられた結果、かえって疑心暗鬼を社会に増大させ、悪循環に拍車をかけている（だけ）のようにみえる事例が、しばしば散見されるように思われるからである。

14 この作品の虚構性をめぐるノンフィクションとしては『キャパの十字架』（沢木 [2013] 2015）を参照。

ではない) 破壊力まで——サブプライムローン問題に端を発するリーマン・ショックや2020年の2月から3月にかけての最初のコロナ・ショックの時のように——有しているのである。

さらに付言すれば、地震や台風などによる土砂災害や浸水被害、高温や乾燥による森林火災や干ばつ等々といった天変地異に代表される地勢的な“リスク”とも一部が重なり合う^{ジオポリティカル}「地政学リスク」もまた、“地政学リスク”といったキメラ的な訳語が散見される現実からも窺えるように) 広い意味では以上で抽出してきた「赤黒い金魚」に分類できるのかもしれない。なぜなら、地域紛争や戦争にまで拡大しうる争いの発端やその背後にあるのは、大抵、「赤黒い金魚」のような怪しげな幻想や過去の幻影であったり、そうした幻像をめぐる微妙な言説や歪んだシグナル——ないしはノイズ——と共に広がる誤解や誤認であって、それらが現場レベルでの判断から最上位の意思決定者との間だけでなく、同様の階層構造をもつ対抗相手との間でも増幅していった結果であるように思われるからである。

逆にいえば、「第三の不確実性」に絡む各種の危機への“解決策”も、究極的には、われわれの間や^{うち}内に“存在”する猜疑心や誤解が解消され、より正

確な用語法や現実理解と、それらに基づく信頼や確信が広く社会に醸成されていく以外にはない、ということになるだろう。その意味では、かつて大恐慌の只中にあった1933年に、アメリカのフランクリン・ローズベルト大統領が大統領就任演説で述べた「恐れるべきは恐怖そのものである」といった趣旨の言葉は、決して単なるレトリックや叱咤激励ではなく、問題の本質や核心の一部を突いた^{プログレッシブ}漸進的で革新的な警句であったと言ってよいのかもしれない¹⁵。

そして何より、破裂した後にはじめて虚構への陶醉から醒める「バブル」の本質はもちろん、その反動として行き過ぎともいえる実体経済の縮減を招くばかりか、新たな^{インダストリー}産業や^{労働}労働への息吹まで摘み取りかねない「第三の不確実性」の幻滅性の芽も、ここにある。すなわち莫大な貨幣収益や巨額の黒字を一部にもたらず「バブルの種」だけでなく、その破裂後の大規模な物理的損害や大幅な赤字を幅広くもたらず「恐慌の種」もまた、^{リアル}実物的なモノづくりの世界と^{ベキョニアリー}貨幣的ないし金銭的なビジネスの世界との交錯や錯綜、ミスリードやミスマッチが浮かび上がらせる「赤黒い金魚」に他ならないと言っても、決して過言ではないのである。

<第一・第二・第三の不確実性の例>

第一の「既知のリスク」	…… 従来のコロナ・ウィルスや通常の債務不履行のリスク ^{デフォルト}
第二の「未知の不確実性」	…… 新型コロナウイルスの感染症の拡大やそれによる各種の被害
第三の「半端な不確実性」	…… 新型コロナウイルスに関する不確定情報やその蔓延による不透明感

15 難しいのは、いわゆる「アニマル・スピリット」の扱いである。通常であれば、不況や景気の底でこれを鼓舞したり、奨励したとしても何の問題もないと思われるが、今回の危機は、新型のコロナ・ウィルスによる未知の「不確実性」を、従来型のコロナ・ウィルスによる風邪やインフルエンザと同類か、それを少し上回る程度の「リスク」にすぎないと（恐らく本人自身に関しては正しく）見切った人による部分もあるように見えるからである。すなわち本人（のみ）については正しい判断を下した個人のアニマル・スピリットが、重症化“リスク”の高い人々にとっての「不確実性」を増幅させ、「第三の不確実性」を派生・伝播させることになっていったという部分も少なくないように思われるのである。

言い換えれば、自身については正しい判断を下した個人が、第三者への悪影響については見誤ったか、配慮が及ばなかったと言わざるをえない部分があることも否定できないように思われるのであり、アニマル・スピリットの発露がかえって感染の規模や恐怖を広める結果になってしまったように見えなくもないということである。したがって、アニマル・スピリットの発揮を推奨する時期や対象が曖昧な場合は、かえって——“風評”という言葉の誤用の場合と同様に——さらなる疑心暗鬼や景気の低迷を呼び起こし、実体経済の萎縮と資産市場のバブルを同時に引き起してしまいかねない危険をはらんでいると言ってよいだろう。このことは、大恐慌時とは異なる今回の危機の重要な教訓と言えるかもしれない。

他方で、アニマル・スピリットや確率・統計論的な観点の重要性を説いたケインズ固有の経済学については、今なお学ぶべき点が多いことも確かである。そうした点については、たとえば、荒川（2002）や吉川（2021）などを参照されたい。

Ⅲ. おわりに：『リスク・不確実性および利潤』の普遍性

以上の考察を経たうえで最後に強調すべき、一番大事とすら言えるかもしれないもう一つのポイントがある。それは、生活人としてのわれわれ個人個人には、「第一の不確実性」と「第二の不確実性」を峻別することが難しいか、そもそも不可能かもしれない、という点である。あるいは、われわれが人生において現実と直面する不確実性のほとんどは、「想像上の」「虚実が入り混じった」「第三の不確実性」であり、その意味でそれは「ヴァーチャルな不確実性」だと言い換えてもよいだろう。なぜなら、過去の他人の手術の成功確率や各種の経済データの変動率、あるいは新型コロナでの重症化率やワクチン接種時の副反応率等々、客観的なデータに基づいて語られる各種の「リスク」は、これから数回ないしは一回経験するかもしれない一大事について決断を下す当人の主観にとっては、未知の「不確実性」以外の何物でもないからであり、これから同様の経験をすることもかもしれない第三者からみても、間に距離のある「第三の不確実性」に見える可能性が少なくないからである。

そもそも英語の「virtual」には、「実際上の」や「事実上の」、あるいは「実質上の」といった意味——いわば実体は伴わずとも本質は現象化されているといった含意——があり、むしろこちらの方が第一義のようだという事実もある。また5年前に「ポケモンGO」で話題となったような「拡張現実（Augmented Reality）」の応用領域が広がり、たとえば農業——より具体的には、出荷時期を見極めるために100キロを超えるブタとも“格闘”しなければならない養豚業——の分野では、「AI（人工知能）とAR（拡張現実）技術を用いて豚の体重を可視化する「スマートグラス」¹⁶が開発されたりしている。さらに今や「日々ゲームを進めることで仮想通貨を採掘し売買したり、育てたモンスターを売買したりして」「ゲームをやり込むだけで月16万円程度稼

げるといい」、そうしたゲーム上のアイテムなどを先進国の富裕層に売ったりして稼ぐため、「東南アジア各国で失業した若者の参入が増えている」¹⁷という。あるいはそうしたエンターテインメントと畜産業の交差領域以外でも、仮想空間のなかに現実世界を再現して産業の現場の変革に活かす「デジタルツイン」¹⁸の技術が、様々な形で普及し始めているといった現実もある。こうした今日の世界や未来の社会ではなおのこと、「仮想」と「現実」の境界はますます混然一体となって融合し、第三の「ヴァーチャルな不確実性」が介在する余地はさらに増えていくに違いない。

と同時に、他方では依然として、今からちょうど100年前にナイトが刊行した『利潤』での議論のように、「リスク＝第一の不確実性」と「真の不確実性＝第二の不確実性」を学術的な立場から峻別することは可能である。同様に、「第二の（真の）不確実性」と「第三の（ヴァーチャルな）不確実性」が介在しない——したがって理論家の頭のなかにしか厳密には“存在”しえない——理念的な「完全競争」状態と、三種の不確実性に満ちた現実の「不完全競争」状態とを理論的に識別し、それぞれについて（「序論」の「第Ⅰ部」につづく）「第Ⅱ部」と「第Ⅲ部」に分けて詳述することも可能である。さらには本稿で思考実験を試みた「二種類の水槽」の仮想のように、二つの間に距離を設けて並置できる“ケース”ないしは展示装置を文章の形で書き起こし、頭のなかで模造することも可能である。そのようにして問題の所在や判断の材料を切り分け、的確な判断に資する論拠を提供することもまた、「想像的な仮説」としての「机上の空論」や「模擬実験」がもつ重要な実践的意義の一つだといえるだろう。

言い換えれば、専門家の学術的な見地や統計的な知見からみれば「リスク（第一の不確実性）」に分類できるものの、生活者の経験値や実践的な見地からみれば現実の「不確実性（第二の不確実性）」と変わらない、未知の懸念材料として度々浮上する

16 この「豚の体重が見えるめがね」については、宮崎大学のプレスリリース（2021年5月25日付）などを参照。

17 小河愛実「デジタル資産 ゲームにも『NFT』取引高3倍、キャラや動画で資金洗浄などリスク」『日本経済新聞』（2021年8月20日付朝刊11面）より。

18 「デジタルツイン」については、『日本経済新聞』（2021年4月16日付朝刊15面）の無署名記事「街・車、ゲーム技術で設計 『フォートナイト』の米社ソフト活用」などを参照した。

「^{ヴァーチャル}事実上の不確実性」こそ、「第三の不確実性」に他ならないと言ってよいのかもしれない。一方において様々な専門家たちが各種の「リスク」について「正しく恐れること」を当事者や第三者に求め、他方において、そのように求められたわれわれが判断を決めあぐね、軽信性に傾いたり、経験に基づく直観や諦観に結局は身を委ねてしまわざるをえない理由の一つはここにある。

そしてただだからこそ、たとえば国ないしは政府のみが、われわれ個人とは次元の異なる超長期的な観点から「リスク」として処理したり、そのコストを負担しうるのは公的な事業を行う意義もあれば、そのための超長期的ないし永続的な資金の調達や借り換えを行う必要もあると思われる。さらには、そうした公益に資する事業やそのために必要な資金の調達や給付が、民意の強い要望とは裏腹に執行されない場合もあれば、逆に家計や民間企業と同次元のミクロの見地（や正義感）に基づいて、無駄で不確実な事業とされ、民意の強い後押しを受けて進んで放棄されたり、長く放置されたままになってしまふといった事態も十二分に起こりうる。そうして社会全体の所得向上の機会や福利厚生チャンスの改善の余地が見過ごされ続けていく間や裏側、隙間や死角では、もちろん、誰かが損失を被り続けていく危険性だけでなく、誰もが「利潤」の獲得に挑戦できる機会でもある「不確実性」もまた、（われわれの知性や人間本性に革命的な進化でも生じないかぎり）常に背中合わせで——国境などの枠組みや各種の境目きりめをも越えて——遍在しているのである。

参考文献

- Cowan, David. 2016. *Frank H. Knight: Prophet of Freedom*, Palgrave Macmillan.
- Emmet, Ross. 2009. *Frank Knight and the Chicago School in American Economics*, Routledge.
- . 2013. “It is a long time between drinks”: The friendship of Frank H. Knight and Fredrick D. Kershner, *Research in the History of Economic Thought and Methodology Volume 31B*, edited by Ross B. Emmet, *Documents Related to John Maynard Keynes, Institutionalism at Chicago & Frank H. Knight*, pp.151-176, Emerald.
- Greer, William B. 2000. *Ethics and Uncertainty: The Economics of John Maynard Keynes and Frank H. Knight*, Edward Elgar.
- Knight, Frank. [1921] 2006. *Risk, Uncertainty and Profit*, Dover Publications Inc (奥隅栄喜 訳『危険・不確実性および利潤』文雅堂銀行研究社 1959年; 桂木隆夫・佐藤方宣・太子堂正称 訳『リスク、不確実性、利潤』筑摩書房2021年).
- Nishimura, Kiyohiko G., and Ozaki, Hiroyuki. 2017. *Economics of Pessimism and Optimism: Theory of Knightian Uncertainty and Its Applications*. Springer.
- Sakai, Yasuhiro. 2019. *J. M. Keynes Versus F. H. Knight: Risk, Probability, and Uncertainty*, Springer.
- 荒川章義 2002. 「確率革命の経済学：J・M・ケインズ」高哲男編著『自由と秩序の経済思想史』名古屋大学出版会.
- 小河愛実 2021. 「デジタル資産 ゲームにも『NFT』取引高3倍、キャラや動画で 資金洗浄などリスク」『日本経済新聞』8月20日付 朝刊11面.
- 桂星子・村上由樹 2020. 「SFに学ぶ新型コロナとの戦い 未来予測がヒントに」『日本経済新聞』3月31日付 夕刊14面.
- ガブリエル, マルクス. 2020. 『新実存主義』岩波書店.
- キング, マーヴィン. 2017. 『錬金術の終わり——貨幣、銀行、世界経済の未来——』日本経済新聞社.
- 倉橋透・小林正宏 2008. 『サブプライム問題の正しい考え方』中央公論新社.
- 黒木登志夫 2020. 『新型コロナの科学——パンデミック、そして共生の未来へ——』中央公論新社.
- ケインズ, ジョン・メイナード. 2014. 『お金の改革論』山形浩生 訳, 講談社.
- 酒井泰弘 2015. 『ケインズ対フランク・ナイト』ミネルヴァ書房.
- 沢木耕太郎 [2013] 2015. 『キャパの十字架』文芸春秋社.
- 竹森俊平 2007. 『1997年——世界を変えた金融危機——』朝日新聞出版.
- 田畑康人・岡村国和 編著 2020. 『読みながら考え

- る保険論 [増補改訂第4版]』八千代出版.
- ナイト, フランク. 2009. 『競争の倫理——フランク・ナイト論文選——』高哲男・黒木亮 訳, ミネルヴァ書房.
- 西村明 2021. 『管理会計の挑戦——リスク・スラック・バランス——』中央経済社.
- 日本経済新聞 2021. 「街・車、ゲーム技術で設計『フォートナイト』の米社ソフト活用」(4月16日付朝刊15面).
- 宮崎大学 2021. 「AI (人工知能) とAR (拡張現実) 技術を用いて豚の体重を可視化——豚の体重が見えるめがね——」(令和3年5月25日付報道発表).
- 吉川洋 2021. 『マクロ経済学の再構築——ケインズとシュンペーター——』岩波書店.